カブトムシ

金屋中・1　嶋　郁之慎

ある日近所の子がカブトムシを持ってきた
そのカブトムシはオスで足がなかった
もともと育てることが好きな私は
足もないし育てることにした
土もなく餌もないので
とりあえず牛乳パックに入れておいた

あちこち回りいろいろそろえた
そのときは興味しかなかった
住みやすい環境に入れようとすると
必死に抵抗した
やっぱり逃がしたほうがいいのかな
でも　足もないし育てることにした

夜になると
すごい羽音を出して逃げようとしている
そうとう逃げたいんだな
やっぱり逃がしたほうがいいのかな
試しにゼリーを置いてみた
すると激しい羽音は静まり
餌に夢中になった
餌が欲しかったのか
なんだか少し分かり合えた気がした
私は最後まで育てようと決心した

毎日毎日様子を見たり
毎日毎日餌を替えたりした
私は母にあきれられた

夏休みにキャンプに行った
山だったので虫がいっぱいだ
昼にわなをしかけ夜に見に行った
カブトムシはいなかった
テントに帰る途中
偶然網を振っていたら
偶然網にメスが入った
持って帰って一緒に入れた
仲間が増えてうれしかった

やがて夏が終わり冬が来た
カブトムシは寿命で死んでしまった
カブトムシにとってはいい人生だったのかな
最後は外に出してあげればよかったかな
いろいろ反省がこみ上げてきた
私は寂しかった
そっと庭に埋めてやった
さなぎの形のように
だいぶ愛着がわいていた
残った土は捨てずしばらく置いておこう

少したってかごを見ると見慣れないものが
幼虫だ
私はまた育てられると思いグッときた

死んだカブトムシたちからのお礼かな
四か月たった頃さなぎになっていた
さなぎはいっぱいあった
土はやわらかくないとだめだから
土替えなどをした
命って大変だけどすばらしい
そんなことをカブトムシが教えてくれた

ある日のぞくと太く勇ましい背
羽化したのだ
とても誇らしくかつてない達成感だった
私がこの世に新しい命を生んだのだ
命の重大さと大変さを知った

私は生まれたカブトムシを
我が子のように扱い
山に返した
自立していく子を見る親のように
飛ぶのを見守った
カブトムシにいろいろ教えてもらった
強く生きてほしい
そう願うだけだった